

ぽたいたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- コラム
- 第6回 源流学講座
- 川上村見聞録⑦
- 吉野川・紀の川流域の遺跡 その1
- 源流の主役たち
- 交流のページ
- 源流人会活動報告

森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

ぽたいたい

源流のひとしづく

春 第10号

ぽたいたい 源流のひとしづく 第10号 発行日 平成18年4月発行
発行所 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

TEL 0746・52・0888

PRINTED WITH SOY INK



源流人会活動報告

12月7日

源流塾たき火のススメ&忘年会

今年度初めての源流塾は辻谷館長の『源流に生きるために三つ焚き火の達人になること』を実践すべく、厳冬の三之公源流学の森、源流の番屋で行いました。忘年会も兼ねて行い、おこした火で飯ごうを使って米を炊き、団子汁で暖まるということに。

さて、この日はこの冬一番の冷え込みで、しかも雪。そんな中、24人の参加者が集まりました。しかし、強い風と雪が降り出したため、小屋の中で開始。参加者は小屋の中で、班ごとに火をおこし、飯ごうで飯を炊いていきました。小屋中での作業で、煙のにおいで大変でしたが、お焦げも良い具合に炊きあがり、団子汁もおいしくいただけました。

この日、もう一つの目玉だったのは湯立て飯。湯立て飯は昔、大峯山の修験者さんがお米を炊いた方法で、大きな鉄鍋で沸騰させたお湯に洗った米を投入して炊きあげる方法。実際に使われていた鉄鍋を館長が譲り受け、今回、初めての挑戦だったのですが、なんと失敗。芯が残ってしまいました。そこで、お米は茶がゆさんに変更。失敗の原因は湯と米の量が少なかったこと。今回は一升でしたが、少なくとも三升は炊か



▲飯ごう炊き



▲いろいろで団子汁



▲雪の中の番屋

1月29日 源流の新年会

当日は今年に入ってから一番の快晴といつていい最高の青空、風もほとんどなく、それまでの厳しい寒さがウソのようなおだやかな日で、天気までが源流の新年を祝っているような一日でした。この日の参加者はスタッフ参加者あわせて21人でした。本日の目玉はシカ肉のバーベキューと湯立て飯。

まず、はじめに前々日に焼いておいた炭を取り出しながら、炭の簡単作成方法からスタートしました。その後、それぞれ、火周りは、料理・湯立て飯班、ベンチづくり班に別れてそれぞれ作業を行いました。湯立て飯は年末の源流塾「たき火のススメ&忘年会」では失敗していたので、前回の失敗を活かして見事にリベンジを果たしました。湯立て飯はいつもバスの運転・行事のサポートでお世話になっている上西規雄さんが丹念に見て下さったおかげで、今回は芯なくおいしく仕上がりました(若干の楽しいハプニングはあったのですが・・・)。食事には、参加者の自慢の一品を披露。やっぱり新年に欠かせないおとそ、故郷の特産

品から、自慢の手作り料理、食後のお団子までともうこれだけでもおなかいっぱいというところ。紹介も終わって、シカ肉とアマゴのバーベキュー。シカはエサの豊富な夏のシカ(狩猟は禁止)が一番おいしいといえます。冬場はエサとなる植物が少なく、やせ細ってしまうので、おいしいというお話。実際、とても美味でした。ちなみにこのシカは柏木でとれたものです。源流の水が、光が、空気が草木に変わり、そしてシカが食べる・・・。本当に自然の恵みに感謝です。



▲バーベキューの準備



▲自慢の一品紹介



▲食事は火おこしから

水源地の森守募金

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替

00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

源流人会募金

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。

ともにも源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

このページは源流人会会員さんや、源流・川上村とつながる個人・団体のみなさんの活動紹介や情報交換の場です。

海老蛙の田舎暮らし

僕が一番興味がある(好きな)動物はカエルです。よく何でカエルが好きになったん?と聞かれるので、好きになったきっかけをお話します。

僕が高1の時、春の遠足から帰ってきた妹がアマガエルを探ってきた。その頃、僕はイモリとツチガエルを水槽で飼っていた。別の水槽にアマガエルを入れたのだが、翌朝、水槽の中を見ると、なんだか白っぽい泡のようなものが見え、中に卵が入っていて驚いた。

図鑑で調べると、このカエルはアマガエルではなく、どうやらシュレーゲルアオガエルというカエルであることがわかる。妹にどこで捕まえたか聞き、さっそく自転車で現場に向かう。そこは里山という感じの、のどかな風景が広がっていた。まだ、水が入っていない田んぼから、「リリリ...、リリリリ...」というきれいな何かの鳴き声が聞こえてくる。偶然、春休みに祖母から自然の音が録音されたカセットテープをもらったのだが、その中にカエルの鳴き声が入っていた。家に帰ってテープを聴いてみると、確かにあの鳴き声はシュレーゲルアオガエルの声であることがわかる。当時、シュレーゲルアオガエルというカエルの種類は知っていたが、こんな近所に生息しているとは思ってもいなかったので、とても驚いた。僕にとっては大発見だった。

このことがきっかけで、市内のあちこちを調べ、どんな種類のカエルが生息しているか研究した。すると、モリアオガエルをはじめ、カジカガエルやタゴガエルなど、珍しいカエルと勝手に思い込んでいたカエルが市内にはたくさん生息していることがわかり、非常にびっくりした。結局、本州に生息しているカエルのほとんどが生息していることがわかった。そして、いつのまにかカエルが大好きになっていた。

現在、僕は『水源地の森』の東隣、三重県宮川村に住んでいます。我が家の周りは山あり川あり田んぼありで、大好きなカエルがたくさん生息しています。家の前の川ではカジカガエルとツチガエルが、川の対岸の田んぼではアマガエルとトノサマガエルとシュレーゲルアオガエルが、裏山から流れてくる沢ではタゴガエルが、そして家の近くの林道ではニホンヒキガエルやナガレヒキガエルが見られます。大好きなカエル達に囲まれて、田舎暮らしを満喫しています。

(戎谷 秀雄)



▲ナガレヒキガエル

本の紹介

『センス・オブ・ワンダー』
レイチェル・カーソン著 / 上遠恵子訳
新潮社 1,470円(税込)



センス・オブ・ワンダー。それは、神秘さや不思議さに目をみはる感性。「沈黙の春」で有名な海洋生物学者レイチェル・カーソン最後の作品。

自然に触れる大切さ。学ぶのではなく感じるもの。子供達の普通に感ずる心。子供を持つ親はぜひ読んで頂きたいです。子供は自然が育てるもの。やさしい文体なので、30分ぐらいで読めて、子供でも理解できます。写真もすごくすてきです。読んでみるとおもしろい自然のある所に行きたくなります。みなさん、川上村にセンス・オブ・ワンダーしに行ってみては!

(源流人会 No.154 照喜納良彦)

ありがとうございました&これからよろしく

もうすぐ桜の季節ですね。4年前の春、当館の玄関前に舞った桜吹雪が鮮明に思い出されます。2002年4月、森と水の源流館前で執り行われた竣工式典、丹生川上神社上社の宮司が青空にはなった細かな紙が、私には桜の花びらが舞うように見えたのです。

竣工式を経て、4月29日みどりの日、多くの方の協力により、森と水の源流館が開館しました。これまでの入館者数は、約6万4千人。私の主な仕事は館の案内、水源地の森ツアーやもりみず探検隊などのイベント企画運営等。館内でも、川上村の森でも、県外でも、ほんとうにたくさんの方に出会えたことは私の財産です。

川上村の自然や村人に出会ってくださった方が、時々でもそのことを思い出し、森や川で過ごすことの楽しさを感じてくれたらとしたり、そして、また川上村に行きたいな、って思ってたかったら、こんなにうれしいことはありません。

あつという間の4年間でしたが、ここで体験したことは、私のこれまでの人生(20年くらい?笑)で一番濃かったかもしれません。

この春、私は、森と水の源流館を卒業することとなりました。これまでのように、館よりメールや電話をとおしてみなさんとお話することはできませんが、今後は、一源流人会会員として、いっしょに源流学の森づくりや、水源地の森の調査・研究、そして、何かわくわくする楽しい企画もできたらいいな〜と企んでいますので、これからもどうぞよろしくお願ひします。

4月、源流の番屋でお会いしましょう!

(スタッフ 林田弥生)



川の春はアマゴから

アマゴつりを吉野川の本流で初めてしたのは、いつの頃からだろうか?
吉野川では、前にも書いたように鮎つりがメインで、その他の魚はごく限られた人がやっていたように思います。吉野川の本流では、かつては村内でも魚の成育域が違いました。詳しいことは研究者で無いので言えませんが、アユは海産の遡上がありました。御勢久右衛門先生の『大和吉野川の自然学』(*)によると、つい最近まで川上村の大滝までは遡上が確認されたようです。
本来アマゴは、水の冷たい上流域に棲み、何でも捕食する割に警戒心が強く、釣り人の気配を感じると隠れてしまいがり、岩魚(イワナ)の方がより上流域に棲み、より猛だとされています。
本流で解禁当初に釣るアマゴ(川上村ではアメゴと呼んでいます)は、養殖のものを1ヶ月前頃から放流するので、養殖池での満たされた環境と違って、餌を捕食できずに「飢えた状態であるのか、警戒心も無く針のついた餌に飛びついて来ます。ですから、同じ場所でも何匹も釣る人がいるのです。餌はイクラを使いますが贅沢な魚です。最初は針ごとパクッと食いつくので喉の奥に針が刺さってしまいます。素早く針を外して餌をつけ再び竿を振り出すことの繰返しを、手返しを多くすると言いますが、そのことが釣果につながるの、アタリ(魚が食いつく感覚)をとって上あごに針がかりさせなくてはなりません。そのうち餌だけをうまく捕っていくアマゴが出てきます。そしておいしい餌には針がついてるのを学習するものも出てきます。そうなるほどピタッと釣れなくなってしまう。時間も関係すると思うのですが、目の前に餌を流しても見向きもせず、避けて泳ぐようになり、全く釣れなくなってしまう。
夕方には急に、短時間ですがまた釣れるようになります。これも養殖池での生活習慣がなせることでしょうか(早朝、夕まづめが元来釣りやすいのですが)。天然のアマゴはこのようには釣れないと思うのですが、解禁当初は良く釣れるのです。
最近では餌釣りよりも、ルアーやフライ、テンカラ釣りといろんな釣り方が行われています。3月解禁から9月末までの間、餌も変わりますし、ルアーやフライも水生昆虫の生体

●テンカラ

和製フライフィッシングのようなものですが、馬の尻尾を釣り糸にします。毛ばりは本物の虫に似せるというより雰囲気をもった毛ばりで、釣り方によって虫が水面に落ちては飛び立つ様子を表現し釣る釣り方です。

●ルアー

ルアーフィッシングといいますが、ルアーは様々な素材でできた疑似餌で、きらきら光ったり、小魚のように動くものに対し食いついてくる性質を利用した釣りです。

●夕まづめ

夕方がちょうどはじまる時間帯





第3回「夏休み！森と水のワークショップ」では、3日間を子どもたちとともに森や川で遊びリーダーをつとめてくれた、通称ともも。以後、卒業論文を川上村をフィールドに、この冬まで通ってくれました。大学生とももの目に吉野川の上流はどううつったのでしょうか？論文を簡単に紹介させていただきます。

交流レポート

見市 智美
(奈良教育大学 教育学部 4 年生)

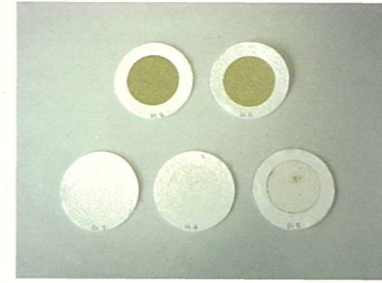
■はじめに
ダム放流水が河川の水質を悪化させるといわれていますが、実際河川にどのような影響を及ぼしているのかを知りたいと思い、2005年6月～12月にかけて大迫ダム貯水池とその上流河川(本沢川・北股川・伯母谷川)、下流河川(吉野川)の調査を行いました。

■ダム放流水が下流河川に及ぼす影響
ダム放流水が下流河川に及ぼす影響として、主に濁水長期化現象・冷水現象・着色現象などが挙げられます。
河川の水は、降雨後濁度が高くなっても数日でもとの状態に戻るのですが、河川の上流にダムがあると、ダムは降雨後濁水した水を徐々に放流するため、下流河川では濁度の高い状態が続いてしまいます。これが濁水長期化現象です。
冷水現象は主に夏場にダムの水深の深い地点の水(冷たい水)を放流すると発生します。着色現象とはダムの底質から溶け出した鉄などによって川や川床に色が着く現象です。川の水に鉄が多く含まれていると赤色に、マンガンが多く含まれていると黒色になります。そのほかにも、河川の水質が変化することによって、水生生物の種類が変化するなどの影響が出ます。



▲写真左が筆者

■調査の結果
今回調査をしてみると、上流河川と下流河川では懸濁物質質量に違いがあることが分かりました。懸濁物質とは水中に浮遊している物質のことで、2mm以下で0.45～1μm以上のものを言います。



▲写真1

上流河川ではほとんど懸濁物質は測定されませんでした。写真1は河川水の懸濁物質を測定した時のろ紙の様子です。上段が下流河川、下段が上流河川のろ紙ですが、上流河川のろ紙はほぼ無色であるのに対し、下流河川のろ紙は褐色に変化していることが分かります。



▲写真2

ダムが影響を及ぼしているのは水質だけではなく、写真2は上流河川の本沢川、写真3はダム直下の吉野川ですが、写真を見比べてみると川の色の違い以外に川の状況に違いがあることが分かります。河原の石の大きさです。写真2の川の周りには砂利や小石がたくさんあるのに対し、写真3ではゴツゴツした岩ばかりが写っています。

なぜこのような違いが起きるのかというと、川の流れることによって小石や砂利などの小さくて軽い石などは運搬されていくのですが、ダム直下では間にダムがあるために上流地点から土砂や小石などが供給されなくなるためです。しかしその一方で、ダム直下にある砂利や小さい石は下流に流れていきます。そういうわけで、写真3の川は大きな岩ばかりになったのです。しかし、問題があるのは下流河川ばかりではありません。先に述べたような土砂や砂利の運搬がなくなるため、ダムの手前の河川では、より上流地点から運ばれてきた土砂や砂利がたまってしまい、川幅が狭くなってしまふ危険があります。



▲写真3

■調査を終えて
普段あまり意識をすることは無いのですが、今回調査をして自分が日常生活で使う水を作るためにダムが作られており、そのダムが周辺河川にも影響を及ぼしているのだということ強く実感しました。特に上流の河川は透明で本当にきれいな川であったので、その川が変化してしまうことは大変残念に思いました。ダムが生活のために必要なものであるとはいえ、複雑な気持ちになりました。

最近では、ダムの建設を見直そうという考えも少しずつ広まってきていますが、ダムが河川環境を変えてしまうということをよく考え、本当に必要であるのかを十分検討した上でダムを建設していく必要があるのではないかと思います。

スタッフより
ともも、卒業おめでとう！社会人になっても、大学生時代を過ごした川上村を忘れないでね！

ちなみに今年は、3月5日が解禁でした。夜は、息子が釣った春のたよりをおいしくいただきました。

併せて色や形も変化していきますし、養殖だったアマゴも本来の野生に目覚めて行くので、数は釣れなくなっていくと思います。水生昆虫が一斉に羽化する一瞬がアマゴもパニック状態になるようで、フライやテンカラで面白いほど釣れるそうです(その状況にめぐり合ったことはありません)。
アマゴの解禁日は3月1日前後なのですが、大体は寒さ厳しい解禁日になります。解禁日前夜、酒を呑みながら「明日の解禁はどこへ行くんです？」と話をしていたら、雪が降ってきて見る間に積もってしまいました。「こんだけ積もったら行かれへんのー」「止めとこか」「止めとこか」と言っただけで翌朝早く目が覚め、じっとして居られず「やっばり、ちょっと覗きに行つてこようか」と、雪を踏みしめ釣りに行ったものでした。あとで聞いたら、「止めとこら」と言っていた者もみんな釣りに行つてたというほど楽しみにしていました。釣堀で釣っているような本流での釣りが出来なくなつて、支流河川の天然物の釣りに主流に戻っていくわけですが、川はもちろんすばらしい環境で、アマゴと競い合う釣りがいままでできるような、何をすべきか、どう向き合うかを考えていきたいと思えます。
前にも書いたか分かりませんが、かつての川の中を見てきた者として、本流は仕方ないとしても是非本物の支流河川や渓谷を森と水の源流館の活動を通して、感じて欲しいと思います。

(坂口 泰二)

●フライ
フライフィッシングのことで、フライは「メイ・フライ(カゲロウ)」に由来した水生昆虫の総称です。水生昆虫の羽化する寸前や羽化した後の成虫の姿かたちを毛筆で表現し、本物が流れているように見せて釣るつり方です。

(*)

御勢久右衛門編著
トンボ出版 (3,600円+税)
*当館にて販売しています





川上生まれ川上育ちの達っちゃん（辻谷達雄館長）は、50年以上の山仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

第六回

山小屋づくり

小屋の柱が立ったので、次の作業に入る前に材料を運び、林道より小屋まで約100mあまり坂道をかきあげなければならぬが、これは大変な作業。そこでワシは、一考を呈して架線をはることにした。一番簡単な方法で、一人でも荷物があげられる架線を考えた。架線の作業は特別な技術が必要とするので、プロにやってもらうことにした。指導はワシがして、夏の一番暑い8月11日に、1日で仕上げた。

架線ができたので、次の源流人会へ向けて間伐材の「木どり」をする。木どりというのは、伐倒して乾燥が出来た木を、用途に合わせて寸法を決めてしるしを入れること。例えば「この木は小屋の桁にいいので6.5mに玉切りする」といったことをするのが木どりである。玉切りとは、それぞれの寸法の印のところに、ノコギリやチェーンソーで挽いて、1本の丸太にするのである。計画どおり、間伐材で小屋に必要な桁、梁、棟木、垂木、等、全部木どりができた。

早速、玉切りして山落としをする。山落としとは、玉切りした丸太を節打ちをして、トビという道具を使って林道まで丸太をすべり落としてくる作業のことである。節打ちとは、丸太についている枝を切り落として、枝の付け根のところを

ヨキやチェーンソーできれいに取り除いて、丸太がすべりやすくするための作業のことである。

一旦全部林道まで落としてしまい、整理する。9月17日の源流人会には、大勢参加してくれたので、用材を軽トラで運んだ。何しろ、6.5mや、5.5mの長い長い丸太を軽トラに積んで林道を走るのは容易ではなかった。失敗して川に落ちると一巻の終わりである。源流人会のみならずの応援で、作業もスムーズに運んで、1日で全部運びあげる。

次はいよいよ柱の上に桁と梁を乗せてゆく作業に入る。まず、桁の上に乗せる高さを決めるために、各柱の根元のレベルを、コンパスを使って決め、印を入れる。これは大事な作業で、床から棟木の位置までの基本になる印である。最後まで残るように、しっかりと印を書き入れた。

最初の桁の高さは、普通の山小屋の場合入口を、入るのに頭が打たない程度にした備えの低い建て方になっているが、この小屋は二段ベットをつくるという計画のもとに、備えの高い建て方にした。ちなみに家の建具（障子・ふすま）の内法は、昔は五尺七寸（約1.81m）であったが、最近では身長の高い人が多くなってきたり、六尺（約2m）の内法に変わっている。したがって、小屋の入口も2mに設計してつくった。内法とは、下敷居と上敷居（上鴨居）の間の寸法のことである。あ、失礼、桁の話でした、ナハハハ。桁にもいろいろあり、縁桁や庇桁等あ



るが、小屋の桁は、表桁と裏桁を取り付けることにした。表とは間口のこと。間口とは、家の正面のことであり、裏へ向けて奥行きという。この小屋は間口が3間で奥行きが2間半である。

まず、表桁を柱の上にかぶせる。柱の上の直線の寸法に合わせて桁に切れ込みを入れ、柱にかぶせる（角材でする場合は、ホゾといって、桁と接合するのに、柱の先に突起した部分をつくり、桁にも突起部分が入る穴を掘って接合する）。

この場合、大事なことは、桁が台風等で飛ばないように、柱との接合部分をしっかりと止めておくこと。小屋はカスガイと針でしっかりと止めたので大丈夫。表桁に続いて裏桁も取りつけた。続いて、翌18日の源流人会も大勢参加してくれたので、昨日の勢いによって梁のせてしまい、棟木もあげてしまおう。普通の家の建築では、棟木を乗せると、棟上といって祝いごとをし、餅をまいたり、祝い酒等をふるまうのであるが、今日はワシの想定外の進行になったので、祝いの準備もしてなく次回に祝い式をすることにした。

桁から上の棟木までに取り付ける、母屋、合掌、棟束、垂木、小舞（*）等のことを、小屋組という。この小屋の場合は、屋根は瓦葺でないので、母屋（桁と棟木の間に入れるもので垂木を支える役目をする）や、合掌（梁の上に瓦などの重みを支える役目をする組み手）は必要でないが、棟木を支える棟束は梁の上に立てた。ここで大事なことは、棟木の高

川上村・吉野川源流の自然を紹介するページです。

第1回 源流の主要たち



木々の芽吹き

奈良県森林技術センター 宮崎 祐子
(☆通称U子。源流人会会員。)



春、それまで沈黙を保っていた木々が一斉に芽吹き、活動を始めます。樹木の芽の中では小さく折りたたまれた葉が徐々にふくらみ、のびあがり、うす緑色の葉を開いていきます。木々の躍動感に魅せられながらも、冬の間枯れたように見えていた樹木のどこにこんなエネルギーがあったのかと不思議な気持ちにもなります。

樹木の活動のエネルギーのほとんどは光合成で作られる炭水化物（デンプンや糖類）です。では、冬の間葉を落としてしまう落葉広葉樹は、春の芽吹きに必要なエネルギーをどこから得ているのでしょうか。

ところで、私たちが「樹木」と呼んでいる植物の特徴は何でしょうか。それは、縦（高さ）方向に成長するだけでなく、横（太さ）方向にも成長する点にあります。樹木は横方向の成長をくり返し、栄養分を貯蔵しておくタンクのような細胞を作り出します。他の細胞が死んでもこの細胞は生きていて、長い間、栄養分の貯蔵の役割を担っています。このことは、他の植物と比べて樹木特有の機能であると言えます。樹木はこの栄養分のストックを様々な目的に利用していると言われています。

葉が開いていくのに合わせて、枝先にある栄養分を貯蔵する細胞の中を観察すると、葉が開いていくのに伴って、栄養分（デンプン）量が減少していくのが分かります（図1、2）。これは、前の年までに枝に蓄えておいたデンプンが新たな葉や枝が作られるために消費されていくことを示しています。葉が開き終わり、新しい葉が光合成を安定して行うようになってくると、枝のデンプン量はまた徐々に増えてゆきます。こうして、葉が落ちる直前の秋、蓄えられた量はピークになり、冬を迎えます。冬の間はデンプンは糖に分解された形で存在し、春の芽吹きの前に、またデンプンの形にいったん戻されてから使われ始めます。

樹木が目に見えて劇的な変化を遂げている春、目に見えない、小さな細胞の中でも劇的な変化が起こっています。

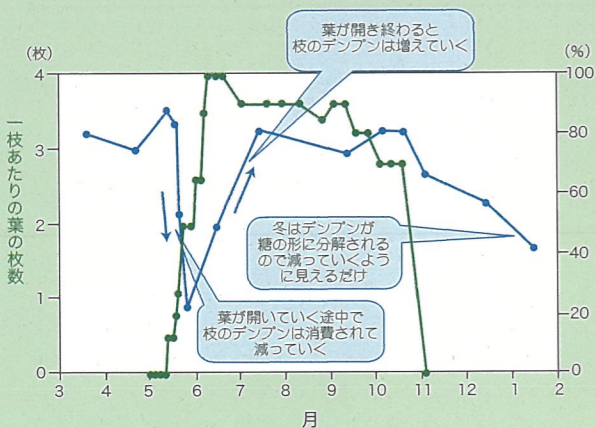


図1 ハクウンボク一葉あたりの葉の枚数と枝のデンプン量の関係

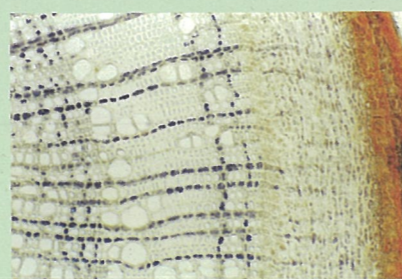


図2 ハクウンボクの枝の横断面切片。向かって右側が樹皮。ヨウ素・ヨードカリ溶液でデンプンを染色しているので、デンプン粒が青紫色に見える。



▲ 左上・右上：架線であげる
左下：辻谷館長 右下：架線であげた材を並べる



▲ 棟束を立てる



▲ 棟木を乗せる



▲ 梁を乗せる



▲ かぶせをつくる



▲▼ 表桁を乗せ、桁と柱をかすがいで固定



この2日間の源流人会参加のみならず、お疲れさんでした。おかげさまで作業もはかどりました。本当にありがとうございます。次回は垂木と小舞を打って屋根ふきを紹介します。

※垂木 小舞を支える柱
※小舞 屋根板の下地

さである。棟木の高さによって屋根の勾配が決まる。(雪の多いところでは、雪のすべりがよいように、急な勾配の屋根にする)。この小屋は、雨の流れがよいように、二寸五分の勾配にした。勾配の計算法は、曲尺の裏面を使った。昔大工さんに教えてもらったのを思い出して計算した。ワシもまだまだ覚えてないようである。ハハハ...



かわぞこのいきものたち

(独) 土木研究所・自然共生研究センター
片野 泉 (☆通称かたの。源流人会会員。)

川の中にすむ生き物という、皆さんがまず最初に思い浮かぶのは魚だと思います。しかし、その魚の多くが、川底に棲んでいるもっと小さな生き物を食べていることをご存知でしょうか。その生き物達の中には、カニやエビなどの甲殻類、貝などの軟体動物、そして前回のぼたりでも紹介されていた、トンボやトビケラやカゲロウなどの水生昆虫がいます。

水生昆虫は、魚に比べると小さくて地味な生き物かもしれませんが、水中めがねや箱めがねを使って川底を覗いてみると、彼らが様々な暮らしぶりを見ることが出来ます。石の上にぴたり貼りついていたり(膜や石で巣を作り、中に引きこもったりもします)、石や落ち葉でできた巣をかついてノロノロ歩いたり、すばやく動いて石の裏に隠れたり。

彼らの暮らしぶりは、餌と深く関わっています。例えば、石に貼り付いて網を張っているものは、上流から流れてくるこまかな有機物を濾して食べているトビケラの仲間です(イモムシのようにでっぴり太ったヒグナガカフトビケラ等がその代表で、釣り餌にすると魚がよくかかります)。落ち葉や砂利の塊がのそのそ動き出したら、それは巣をかついだトビケラの仲間。よく見ると、巣から小さな頭や脚が出ているはず。彼らは落ち葉や、石に着いた付着藻類(茶色のヌルヌルのことで、藻の仲間です)を食べて生きています。また、見るからに強そうにゴソゴソ歩くのはカワゲラの仲間、彼らは見た目通り力強く、自分より小さな水生昆虫を食べています。

水生昆虫は、その名の通り昆虫なので、幼虫時代と成虫時代があります。水の中で捕まる水生昆虫はほとんどが幼虫で、先ほど書いた暮らしぶりは幼虫のもので。幼虫の捕まえ方は簡単で、膝下ほどの水深で、足が取られない程度によく水が流れている場所(瀬と呼びます)で、自分の下流側に目の細かい網をかまえ、足で川底を蹴ったりかき混ぜたりすればOKです。引き上げた網の中にはたくさんの幼虫が入り、バケツやバットにあげてみると、幼虫が大勢動いているはず。その動きや体つきから、川の中でどんな暮らしをしていたのか、想像してみてください。

いっぽう、成虫は、交尾・産卵が主な仕事で、羽をもち水中から陸上へと生活の場を変えます。多くの種類が、初春から初夏にかけて羽化し成虫となるため、この頃には水中だけでなく川の周囲全体で、水生昆虫の様々な賑わいが見られます。春先の夕暮れ時に川のそばにいたら(川沿いの国道などでも)、ためしに頭上を見上げてみてください。上流へと勢いよく群れをなして飛び、雌成虫の遡上飛行が見られるはず。これは、川という生態系の特徴をあらわしていると考えられる現象です。上流から下流へと一方向に流れている川の中で暮らす生き物は、常に下流側へと少しずつ流されながら生きています。よって、一生のうち、少しでも住み場所を上流へ戻してやる機会がないと、その子供や孫達はその場で住み続けることができないのです。そのために、川の流れから自由になる成虫時代に、雌が上流側へ卵を産みに行くことで、子供達の生息場所を上流側へ戻しているのだと考えられています。つめたい水が流れていた冬の間も、川の中で多くの生命が育まれていて、今それが次の世代を生むために多くの個体が群れになって上流側へと上っていく。夕暮れ時の空に、その光景は、生命のダイナミズムのようなものを感じさせます。

どうぞ皆さんも一度、幼虫や成虫を見つけて観察してみてください。そして、かわぞこにすむ小さななかまたちに興味を持ってくだされば幸いです。



巣をかついだトビケラの仲間は、蛹になる時に、石の裏などに数多く集まる習性があります。しかしその理由はまだ分かっていません。皆と一緒に羽化するチャンスを狙うためか、捕食者に狙われるのを防ぐためか、どうしてでしょう?

(写真: 土手塚工房)



春、交尾・産卵のために、川岸の砂州に大勢群がるモンカゲロウの成虫。水際線によって黒い帯状になることもあります。

水生昆虫の様々な賑わいが見られます。上流へと勢いよく群れをなして飛び、雌成虫の遡上飛行が見られるはず。これは、川という生態系の特徴をあらわしていると考えられる現象です。上流から下流へと一方向に流れている川の中で暮らす生き物は、常に下流側へと少しずつ流されながら生きています。よって、一生のうち、少しでも住み場所を上流へ戻してやる機会がないと、その子供や孫達はその場で住み続けることができないのです。そのために、川の流れから自由になる成虫時代に、雌が上流側へ卵を産みに行くことで、子供達の生息場所を上流側へ戻しているのだと考えられています。つめたい水が流れていた冬の間も、川の中で多くの生命が育まれていて、今それが次の世代を生むために多くの個体が群れになって上流側へと上っていく。夕暮れ時の空に、その光景は、生命のダイナミズムのようなものを感じさせます。

吉野川・紀の川流域の遺跡～その1～

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

「宮の平遺跡の切目石鍾」

宮の平遺跡からは多くの縄文土器や石器が発見されていますが、なかでも切目石鍾はこの遺跡を代表する石器のひとつです。この石器は刺し網の鍾として使われたと考えられており、手のひらに納まる程度の扁平な川原石で作られています。

切目石鍾そのものは、縄文時代の遺物としてはそれ程珍しいものではありませんが、宮の平遺跡からは442点も発見されており、ひとつの遺跡から発見された例としては現在のところ全国最多になります。

この切目石鍾には網を引っ掛けるための切り込みがあります。通常は両端に1ヶ所ずつですが、宮の平遺跡では片側に2ヶ所の切り込みを入れたものがいくつか混じていました。これは流れの速い場所で網を使う時、鍾が外れにくいように工夫したものではないかという説があります。

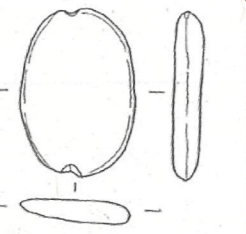
実はこのようなタイプの石鍾はあまり例が知られていません。今後の調査で増加する可能性があります。奈良県内では宮の平遺跡と吉野町丹治遺跡・東吉野村中出遺跡（吉野川流域）だけです。その他には三重県多気町新徳寺遺跡・舟戸遺跡（橿田川流域）・大紀町大西遺跡（宮川流域）でも発見されています。現在知られているのはこの6遺跡のみですが、これらの遺跡がいずれも台高山脈に源を発する河川の上流域に点在していることは注目されます。

吉野川（紀の川）から高見山を越えて三重県橿田川・宮川流域に至るルート上には、宮の平遺跡をはじめとして東日本系の土器の出土が報告されている遺跡（吉野町宮滝遺跡・大淀町佐名伝遺跡・三重県松阪市磯田畑遺跡・度会町森添遺跡など）が分布しています。また石器の材料となる二上山（奈良県香芝市）産のサヌカイトが三重県側に大量に運ばれており、吉野川と橿田川・宮川が東西日本をつなぐ重要な交通路であったことが分かります。

今回取り上げた切目石鍾は、現地の材料で子供でも簡単に作れるものです。同じタイプの切目石鍾が台高山脈を挟んだ地域に見られるのは、物の流通だけではなく吉野川流域と橿田川・宮川流域の人々が直接往来し、生活の知恵を共有していたことを示しているのではないのでしょうか。

宮の平遺跡の切目石鍾は常設展示しています。また吉野町丹治遺跡・東吉野村中出遺跡の切目石鍾については、森と水の源流館で保管しています。事前にお申し込みいただければ直接ご覧いただけます。

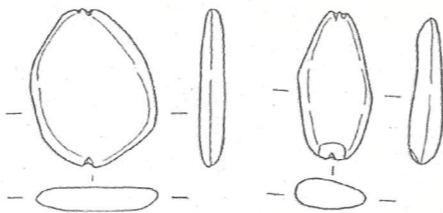
* 参考
通常の切目石鍾
(宮の平遺跡出土)



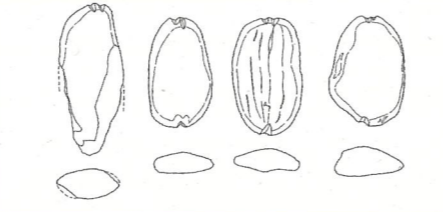
参考文献
 橿原考古学研究所「青陵」109号 2002
 勢和村教育委員会『片野殿垣内遺跡発掘調査報告』2001
 三重県埋蔵文化財センター『新徳寺遺跡』1997
 奥義次「大宮町の先史遺跡」『大宮町史』大宮町史編纂委員会 1987
 松田真一「吉野を縦横に走る縄文街道」『吉野仙境の歴史』文英堂 2004

各地の切目石鍾

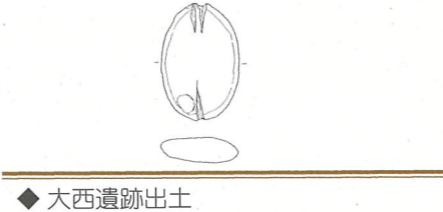
◆ 宮の平遺跡



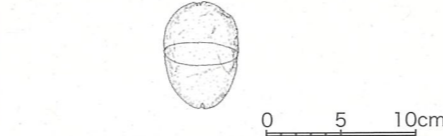
◆ 中出遺跡出土



◆ 新徳寺遺跡出土



◆ 大西遺跡出土



宮の平遺跡と同タイプの切目石鍾 出土地



国土地理院承認平14 総復第149号を一部改変



社の奥は廟所と言われています。



後龜山天皇の皇子、小倉宮實仁親王が1442年にこの地で62歳で亡くなった後、郷民が「住吉大明神」として祀ったのが、この社の始まり、とされています。川上村は、ここを宮の行宮所在地として、また廟所伝承遺跡として文化財指定にしています。



史跡小倉宮廟所住吉社（南北朝時代）への登り口。趣のある、なが〜い石の階段。

「小倉宮實仁親王御墓」

参考
村教育委員会設置案内碑
*小倉宮の生涯については諸説ありますが、今回のレポートでは案内碑の記述を優先しました。

毎年2月5日は、川上村内3ヶ所で、大切な伝統行事が行われます。神之谷集落と高原集落では後南朝の悲運の皇子らを偲ぶ「朝拝式」が行われ、東川集落では後南朝史の立役者である小倉宮をおまつりする行事が行われます。今回は2月5日の東川集落の様子をレポートします。
*写真は2004年2月5日撮影のもの。

文政9年（1826年）11月材木商人中から奉納された石灯籠。さすが林業の村！

川上村見聞録 7

*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。



海の幸、山の幸、御神酒などたくさんのお供えを準備。 順番に手渡してお供えしていく。 神主さんから玉串を受け取り、奉納。 みんなで拝む。



ゴクまきも終わりに近づいて・・・笑顔、笑顔。 そして小学校跡に移動してにぎやかにゴクまき。お餅をまくのも、拾うのも、どちらも真剣！ 神社の境内でゴク（お餅）をひとまき



お供えものを持って。みんな笑顔が素敵！ 神主さん2人。

行事を担う人々。東川も住民が一年交替で務める「一年神主」の古い風習が残る。

番外編